様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５１０２６７
研究課題名（和文）　近代日本の兵士的男性性構築のジェンダー・ポリティクスと〈女性〉のエージェンシー

研究課題名（英文）*Women'* s agency in gender-political construction of soldiered man character in modern Japan

研究代表者
海妻　径子（KAIZUMA　KEIKO）
岩手大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：１０４２２０６５

研究成果の概要（和文）：近代日本における男性性の構築には、植民地事業への参加を通じてホモソーシャルと自己犠牲的男性性が構築され、それが植民地主義の深まりとともに兵士的男性性へと展開し、ヘゲモニックな男性性の位置を占める、という図式は必ずしもみられなかった。ミソジニーが明確にみられたのはむしろ都市新中間層男性の男性性言説の方であった。この点はイギリス男性史等の先行研究の知見と異なる。このような結果が生じた背景には、「開拓」において女性が占めた役割、あるいは都市中間層の男性性言説構築をめぐる＜女性＞のエージェンシーと＜男性＞のエージェンシーとの間のポリティクスの差異が存在していると考えられる。

研究成果の概要（英文）: Based on an analysis of media discourses in modern Japan, there is no clear formulation of "homo-social" and masculine self-sacrifice. It is contrast with earlier analysis of modern England masculinities: such formulation provided useful soldiered man character for English colonialism. In modern Japan, misogynic discourses are remarkable among urban middle class men rather than male and female colonists. To understand Japanese colonial masculinities, it is necessary to focus on two factors: (1) the women's role on *exploring lands,* and (2) agency of women/men in gender-political construction of discourses on urban middle class masculinity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	300,000	90,000	390,000
2008 年度	300,000	90,000	390,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
総　計	1300,000	390,000	1690,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー
キーワード：男性学・日本史・思想史

１．研究開始当初の背景

研究開始当初のジェンダー研究においては、ジェンダー・ポリティクスが複数のエージェンシー（遂行主体性）の間でいかに展開してきたのかを明らかにしようというアプローチに注目が集まっていた。とりわけ、ある側面で＜男性＞や＜資本＞のエージェンシーと＜共謀＞しつつ、女性性の＜ずらし＞をおこなった＜女性＞エージェンシーとしての「モダンガール」に対しては既に大きな注目が集まっており、2004 年 9 月には「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」研究会とお茶の水女子大学ジェンダー研究センターの共催、ワシントン大学「世界のモダンガール」研究会の協力による国際シンポジウム「アジアのモダンガールと＜世界＞―グローバル資本・植民地的近代・メディア表象―」が開かれるなど、国際的にも研究交流・研究成果が積み重ねられつつあった。

しかしながら、このような複数のエージェンシー間でのジェンダー・ポリティクスへの関心は、現段階ではもっぱら女性性をめぐる局面に対して注目が集中していた。男性性を各時代や各階級ごとに形成された固定化したカテゴリーとして分析するのではなく、複数のエージェンシー間のジェンダー・ポリティクスによってたちあらわれてくるもの、としてとらえ、男性性の＜ずらし＞や＜再編＞に注目する研究は、海外を中心に徐々にあらわれつつあったものの、研究開始当初の段階では、十分ではなかった。しかも海外の研究も含めて、男性性の＜ずらし＞や＜再編＞を＜男性＞エージェンシーを中心に考察するのではなく、＜女性＞エージェンシーに注目する、という研究は少なかった。

申請者は研究開始に先だって既に、フェミニストの愛国的保守主義への転進に、資本主義社会の矛盾から女性を守るものとして男性性の＜再編＞を要請した＜女性＞エージェンシーの主張を読み取った「＜稼ぎ手としての男性＞要求から＜愛国主義＞へ　―山田わかの女性保護論」（小玉亮子編『現代のエスプリ 446　マスキュリニティ／男性性の歴史』至文堂、2004、 pp.173-183）、などにおいて、男性性の＜再編＞への＜女性＞エージェンシーのかかわりを考察する試論を展開していた。このようなアプローチをさらに展開し、層や集団としての＜女性＞エージェンシーがいかに男性性の＜再編＞にかかわったのかを、より豊富な資料にもとづき明らかにしていく必要性は明らかであった。

２．研究の目的

本研究の目的は、近代日本の男性性構築過程のなかでも、兵士的男性性（国家への忠誠や女子どもの保護を、男らしさの中核と考える）に注目し、兵士的男性性の構築に＜女性＞エージェンシーがどのようにかかわり、＜国家＞が有したエージェンシーとの間でどのような＜対立と共謀＞＝ポリティクスが生み出されたのかを把握することであった。

海外における研究動向に照らしてみても、本研究のように、男性性の＜ずらし＞や＜再編＞をめぐるジェンダー・ポリティクスを＜女性＞エージェンシーに着目して明らかにしようとするものは少ないが、とりわけ、兵士的男性性の構築過程に注目する研究の多くは、もっぱら＜国家＞エージェンシーの関与に注目するのみであり、＜女性＞エージェンシーの関与にまで分析視座をひろげたものは少ない。しかも、女性が女性性の肯定的評価を国家に求めるあまり帝国主義に加担した、という「女性の国民化」問題の歴史的評価がジェンダー研究の課題として焦点化されている日本においては、本研究のような視座が非常に重要となる。

以上のような海外・日本における研究動向をふまえ、本研究では、近代日本における男性性の＜再編＞と「女性の国民化」がどのように関係したのかを明らかにすることにより、「女性の国民化」問題をめぐる議論が新たな論点を獲得することを目的とした。

３．研究の方法

具体的な研究方法としては、男性性構築過程における＜女性＞のエージェンシーを

（１）都市新中間層を中心とし、近代家族的価値観を形成しつつあった女性、

（２）女性工場労働者および農業女性、

（３）植民地事業への何らかの参画者であった女性、

という３属性の女性のエージェンシーの複合体としてとらえ、それぞれの属性の女性にひろく読まれていたと考えられるメディア（雑誌、新聞、修養読み物など）の分析を行い、そこにみられる男性性言説を収集する。

その上で、収集したそれらの男性性言説において、兵士的男性性がいついかなるかたちで登場、および文化的ヘゲモニーをにぎっていったのか、そしてそのプロセスはどのような＜女性＞の利害の文脈上に要請されていたのか、を分析する。上記３属性の属性を帯びる女性たちは、＜女性＞エージェンシーとの間での＜対立と共謀＞の対手たる＜国家＞が、

（１）最も好ましい次世代再生産の担い手、

（２）産業生産力の担い手、

（３）植民地政策および経済の支え手、

としてそれぞれ期待していたと考えられ、かつそのような＜国家＞の期待の相違に対応して＜女性＞の利害も属性ごとに相違が生じ、したがってそれぞれの＜女性＞が、兵士的男性性構築にかかわる際の文脈もまた、異なったものとなったであろうことが、予想さ

れるため、分析はこれらの３属性に着目し、（１）～（３）の間での比較検討も、交えつつ行う。

具体的には、

（１）都市新中間層を中心とし、近代家族的価値観を形成しつつあった女性のエージェンシーを明らかにするものとして、愛国婦人会機関紙『愛国婦人』分析をはじめとする、都市新中間層女性の男性性言説に対する分析、

（２）女性工場労働者・農業女性のエージェンシーを明らかにするものとして、処女会および大日本連合女子青年団関連資料、『家の光』、などの農業女性の男性性言説に対する分析、

（３）植民地事業への何らかの参画者であった女性のエージェンシーを明らかにするものとして、『拓け満蒙』などの開拓プロパガンダ雑誌にみられる植民地開拓事業に関わった女性たちの男性性言説に対する分析、

を行った。

加えて、上記の分析の考察を深めるために、

（４）男性俸給生活者向け雑誌『サラリーマン』分析などの都市新中間層男性の男性性言説に対する分析、

および

（５）John Tosh らイギリスの男性史研究を中心に、男性性の〈再編〉についてのすぐれた考察を示している欧米の男性性研究の知見を検討し、考察に必要な男性性研究理論枠組みの検討も、あわせて行った。

４．研究成果

以上の分析の結果、次のような点が明らかとなった。

（１）植民地開拓事業および農村における女性の男性性言説において、「家庭」の「明るさ」という概念が、男性性構築に重要な役割をもっていること。この点自体については、既にいくつかの先行研究においても類似の指摘がなされている知見ではあるが、特に本研究では、植民地開拓事業および農村における男性性言説にみられる「家庭」イデオロギーを、都市中間層に発したモダニズムの農村への単純な波及としてはとらえることができない、「大陸の新家庭」における男性性構築をめぐる、女性と男性との、共闘・共謀と対立の相克であり、複数の対抗的男性性の構築プロセスであることが、明らかとなった。

植民地事業と男性性との関係性において「家庭」イデオロギーが果たすアンビバレントな役割については、John Tosh による Manliness and Masculinities in Nineteenth-Century Britain; Essays on Gender, Family and Empire. (Pearson Education Ltd. 2005) や Trev Lynn Broughton & Helen Rogers の編による Gender and Fatherhood in the Nineteenth Century.(Palgrane Macmillan, 2007) 等でも指摘されているが、これらの研究の知見と比較した際に、植民地事業をアリーナとした日本の男性性構築における特徴として指摘できるのは、ホモソーシャル（女性排除的な男性紐帯）の存在が必ずしも明確にはならない点である。当然のことながらこのことは、植民地主義に＜女性＞エージェンシーが占めた位置の違いを反映していると考えられる。

（２）（１）で述べたような植民地開拓事業および農村における男性性言説の構築過程およびそこにおける＜女性＞エージェンシーの位置がもつ特徴は、『愛国婦人』分析をはじめとする、都市新中間層女性の男性性言説に対する分析、および男性俸給生活者向け雑誌『サラリーマン』分析などの都市新中間層男性の男性性言説との比較分析を通じて、さらに明確となった。既存の研究が都市新中間の男性性言説を分析する場合、もっぱら近代家族的価値観を形成しつつあった女性およびその同調者としての男性の言説に着目しがちであったために、そこにはミソジニー（女性嫌悪）が明確にはみられず、したがってミソジニーがどのように男性性構築に結びついていくのかは、明らかとはなっていなかった。しかし本研究においては、都市新中間層男性の男性性言説にミソジニーが強く存在することを確認することができた。

（３）イギリスの男性史研究などで指摘されているような、植民地事業への参加を通じて自己犠牲的な男性性が構築され、その構築過程においては敬虔主義のような宗教的要素が重要な役割を果たす、という図式は、日本においては必ずしも明確にはみられない。日本での植民地事業を通じての男性性構築過程においても、仏教・神道等が一定の役割を果たした可能性は捨てきれないものの、むしろ特定の個人（年長男性）に対する心酔が強くみられており、このことはイギリスの男性史研究などで指摘されている自己犠牲的男性性とは異なる男性性が、植民地開拓事業を通じて構築され、ひいてはそれが兵士的男性性（国家への忠誠や女子どもの保護を、男らしさの中核と考える）の近代日本における特徴を生み出していると考えられる。

（４）以上のように、近代日本における男性性の構築においては、植民地事業への参加を通じてホモソーシャルと自己犠牲的男性性が構築され、それが植民地主義の深まりとともに兵士的男性性へと展開し、ヘゲモニックな男性性の位置を占める、というような図式は必ずしもみられない。ミソジニーが明確にみられるのはむしろ都市新中間層男性の男性性言説の方である。この点については、日本における植民地事業が、イギリス等男性史

の先行研究が取り上げている植民地事業とどのような点で異なるのかを検討した上で、それが男性性構築に果たした意味を分析する必要があるということである。とりわけその際には、「開拓」において女性が占めた役割、あるいは都市中間層の男性性言説構築をめぐる＜女性＞のエージェンシーと＜男性＞のエージェンシーとの間のポリティクスに注目すべきであることは、言うまでもない。

本研究の今後の課題としては、以上のような研究結果をふまえ、さらに分析対象資料を増やし、近代日本の男性性の構造の全体像を明らかにする。その上で、男性性の構造を、ホモソーシャルおよびその反作用としてのミソジニーとホモフォビアの、３つの軸に沿って構築されているものととらえ、その構造の日本的特徴を明らかにすることであるといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
海妻径子、父性(ジェンダーをめぐるキーワード)、ジェンダー史学、査読無し、第３号、2007、65-68

〔学会発表〕（計１件）
海妻径子、日本の男性性研究&運動の課題とは何か ―フェミニズム・スタディーズの立場から― 日本文化人類学会、2007.6.2、名古屋大学（愛知県）

〔図書〕（計１件）
海妻径子、明石書店、身体とアイデンティティ・トラブルジェンダー/セックスの二元論を超えて、2008、49-68

６．研究組織
(1)研究代表者
海妻　径子（KAIZUMA　KEIKO）
岩手大学人文社会科学部准教授
研究者番号：１０４２２０６５